

日清通商航海條約御批准ノ件

右謹テ上奏シ恭シク

聖裁ヲ仰キ候セテ樞密院ノ議ニ付セラレシコトヲ請フ

明治二十九年八月二十八日

内閣總理大臣候爵伊藤博文



天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル  
大日本國皇帝(御名)此書ヲ見ル有衆ニ宣  
示ス朕明治二十八年四月十七日帝國ト大清  
國トノ間ニ締結セシ媾和條約第六條ノ規  
定ニ基キ明治二十九年七月二十一日北京ニ  
於テ兩國全權委員ノ記名調印シタル通商  
航海條約ノ各條目ヲ親シク閱覽點檢シ夕  
ルニ善ク朕ノ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ  
右條約ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百五十六年  
明治二十九年 月 日東京宮城ニ於テ  
親カラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム  
御名 國璽

外務大臣侯爵西園寺公望

日清通商航海條約

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下、明治二十八年四月十七日即光緒三十四年三月十三日下ノ關ニ於テ調印セラレタル條約第六條ノ規定ニ依リ通商航海條約ヲ締結スルコトニ決セリ因テ大日本國皇帝陛下ハ北京駐劄特命全權公使正四位勳一等男爵林董ヲ大清國皇帝陛下ハ欽差全權大臣總理各國事務大臣尙書銜戶部左侍郎張蔭桓ヲ各其ノ全權大臣ニ任命シタルヲ以テ兩國ノ全權大臣ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

### 第一條

大日本國皇帝陛下ト大清國皇帝陛下トノ間並ニ兩國臣民ノ間ニ永遠無窮ノ平和及親睦アルヘシ而シテ兩國臣民ハ各々兩締盟國ノ一方ニ於テ其ノ身體及財產ニ對シ等シク完全ナル保護ヲ享有スヘシ

### 第二條

大日本國皇帝陛下ハ便宜ニ從ヒ其ノ外交官ヲ清國ニ駐劄セシムルコトヲ得大清國皇帝陛下モ亦便宜ニ從ヒ其ノ外交官ヲ日本國ニ駐劄セシムルコトヲ得

右駐劄外交官ハ各々國際公法ニ因リ之ニ附與スル一切ノ權利、特權及免除ヲ享有シ且總テ最惠國ノ同様ノ外交官ニ附與スル所ノ待遇ヲ受ルコトヲ得其ノ身體、家族、隨員、衙署、居館及往復書信ハ犯スヘカラサルモノトス

右外交官ハ毫モ障礙セララル、コトナク其ノ役員、使丁、通譯人、僕婢及從者ヲ隨意ニ選用スヘシ

第三條

大日本國皇帝陛下ハ外國通商ノ爲メニ現ニ開カレ若ハ將來開カルヘキ清國ノ港市ノ内日本帝國ノ利害ニ必要ナリト認ムル場所ニ總領事、領事、副領事及代辦領事ヲ駐在セシムルコトヲ得

右領事官ハ清國官吏ヨリ相當ノ禮遇ヲ受ケ且最惠國ノ領事官ニ現ニ附與シ若ハ將來附與スヘキ總テノ資格、職權、裁判管轄權、特權及免除ヲ享有スヘキモノトス

大清國皇帝陛下モ亦同シク日本國內ニ於テ他國ノ領事官カ現ニ駐在シ若ハ將來駐在スヘキ場所ニ總領事、領事、副領事及代辦領事ヲ駐在セシムルコトヲ得而シテ右領事官ハ日本國ニ在ル清國臣民及財産ニ對スル日本帝國裁判所ノ裁判管轄權ニ屬スル事項ヲ除ク外通常領事官ニ附與スル權利及特典ヲ享有スヘシ

第四條

日本國臣民ハ其ノ家族、雇員及僕婢ト共ニ現ニ外國人ノ居住貿易ノ爲メ開キ又ハ將來開クヘキ所ノ清國ノ諸港諸市ニ往來シ、住居シ、商工業製造業ヲ營ミ又ハ其ノ他一切合法ノ職業ニ従事シ且其ノ商品及携帶品ヲ搭載シ前記諸開港地ノ間ヲ隨意ニ往來スヘク又其ノ地ニ於テ外國人ノ使用及占有ノ爲メ既ニ選定シ若ハ將來選定セラルヘキ地區内ニ於テ家屋ヲ貸借賣買シ地所ヲ貸借シ寺院、墓所、病院ヲ建設スルコトヲ得但シ此等一切ノ事項ニ付最惠國ノ臣民或ハ人民ニ現ニ附與シ若ハ將來附與スヘキモノト同一ノ特權及免除ヲ享有スヘキモノトス

第五條

日本國船舶ハ現ニ立寄港ナル安慶、大通、湖口、武穴、陸溪口及吳淞併ニ將來立寄港トセラルヘキ總テノ場所ニ於テ外國貿易ニ關スル現行章程ニ從ヒ旅客商品ヲ上陸セシムル爲メ之ニ寄港スルコトヲ得

清國ノ諸開港及諸立寄港外ノ港ニ不法ニ進入シ若ハ沿海及河筋ニ於テ密商ニ従事スル船舶ハ其ノ積荷ト共ニ清國政府ニ於テ之ヲ沒收スヘキモノトス

第六條

日本國臣民ハ自國領事ヨリ下附シ地方官ノ副署シタル旅券ヲ携帶スルトキハ游歴又ハ商用ノ爲メ清國內地ノ各部ニ旅行スルコトヲ得而シテ該旅券ハ旅行地方ニ於テ檢査ヲ求メラレタルトキハ之ヲ示スヘキモノトス該旅券ニ不正ノ點ナキニ於テハ携帶者ハ進行ヲ許可セラレ且其ノ旅行用ノ爲メ又ハ携帶品商品運搬ノ爲メ人夫、畜類、車輛、船隻ヲ雇入ル、ニ故障アルヘカラス若シ旅行者ニシテ旅券ヲ携帶セス又ハ法律ヲ犯ストキハ之ヲ處分スル爲メ最寄ノ領事官ニ引渡スヘシ但シ其ノ際唯必要ノ拘束ヲ加フルノミニシテ決シテ之ヲ虐待スヘカラス旅券ハ之ヲ發シタル日ヨリ清曆十三個月間効力ヲ有スヘシ日本國臣民旅券ヲ携帶セスシテ内地ニ旅行シタルトキハ三百兩ヲ超過セサル罰金ニ處スヘシ尤モ日本國臣民ハ各開港地ヨリ一百清里以内ニハ五日間ヲ限トシ旅券ヲ携帶セスシテ游歴スルコトヲ得但シ本條ノ規定ハ之ヲ船舶乘組ノ水夫ニ適用スルコトヲ得

清國ノ開港地ニ住居スル日本國臣民ハ清國臣民ヲ雇入レ總テ正當ノ業務ニ之ヲ使用スルコトヲ得

但シ清國政府又ハ官吏ニ於テ之ヲ制限シ或ハ妨碍スルコトヲ得ス

第八條

日本國臣民ハ荷物又ハ旅客運搬ノ爲メ一切ノ艇隻ヲ賃借スルコトヲ得而シテ之カ爲メ拂フヘキ金額ハ貸借人相互ノ間ニ於テ之ヲ定メ清國政府又ハ官吏之ニ干涉スルコトヲ得ス艇數ニ對シ制限ヲ置クヘカラス又ハ右艇隻ニ關シ若ハ貨物運搬ニ從事スル人夫ニ關シ何人ニモ專業免許ヲ附與スルコトヲ得ス而シテ右艇隻ヲ以テ密商ニ從事スルモノハ法ニ照シ之ヲ處罰スヘシ

第九條

清國ト泰西諸國トノ間ニ實施スル税目及税則ハ日本國臣民カ清國へ輸入シ若ハ日本國ヨリ清國へ輸入シ又ハ日本國臣民カ清國ヨリ輸出シ若ハ清國ヨリ日本國へ輸出スル際一切ノ物品ニ適用スヘシ清國ト泰西諸國トノ間ニ存在スル税目及税則ニ於テ特ニ輸入若ハ輸出ヲ制限シ若ハ禁止セサル物品ハ規定ノ輸入税若ハ輸出税ヲ拂フノミニテ自由ニ清國へ輸入シ若ハ清國ヨリ輸出スルコトヲ得ヘシ但シ日本國臣民ハ何等ノ場合ニ於テモ最惠國臣民若ハ人民カ清國ニ於テ現ニ納メ若ハ將來納ムヘキ輸出入税ニ異ナル或ハ之ヨリ多額ノ納税ヲ要セラル、コトナカルヘシ又日本國ヨリ清國へ輸入シ或ハ清

國ヨリ日本國へ輸出スル一切ノ物品ハ其輸出入ニ際シ最惠國ヨリ輸入シ或ハ之へ輸出スル同様ノ物品ニ對シ清國ニ於テ現ニ課セラレ若ハ將來課セラレヘキモノト異ナル或ハ之ヨリ多額ノ税ヲ課セラレ、コトナカルヘシ

第十條

日本國臣民カ清國へ輸入シ或ハ日本國ヨリ清國へ輸入シタル一切ノ物品ハ現行章程從ヒ開港場ト開港場ノ間ヲ運搬中其ノ所有者ノ國籍或ハ之ヲ運搬スル運具船舶ノ國籍如何ニ拘ハラヌ之ニ對シ全ク各種ノ税金、賦課金、手数料、釐金等ヲ取立ツヘカラス

第十一條

日本國臣民ニシテ輸入物品ヲ清國內地ノ市場ニ運搬セムト欲スルモノハ其ノ物品ノ税品ナルトキハ輸入税ノ二分ノ一、無税品ナルトキハ從價二分半ニ當ル抵代税ヲ拂ヒテ其ノ物品ニ對スル一切ノ通過税ノ免除ヲ受ルコト其ノ勝手タルヘシ而シテ右抵代税ヲ拂ヒタルトキハ該物品ニ對シ一切ノ内地税ヲ免除スル爲メ證書ヲ發附スヘキモノス

但シ本條ハ輸入阿片ニハ適用セサルコトト知ルヘシ

第十二條

清國ニ在ル日本國臣民カ清國開港外ノ地ニ於テ買入レタル一切ノ清國生産物及物品シテ輸出セラレムトスルモノハ前條ニ記載シタル税率ニ依リ輸入税ノ代リニ輸出税基礎トシテ算出シタル抵代税ヲ拂ヒタル上其ノ輸出ニ際シ單ニ輸出税ヲ拂フ外ハ清

各地ニ於テ各種ノ税金、賦課金、手数料、釐金等ヲ免セラルヘシ但シ右ハ前記ノ生産物及物品ニシテ通過税仕拂ノ日ヨリ十二個月ノ期限内ニ現ニ外國ニ輸出セラレタル場合ニ限ル

日本國臣民カ清國ノ開港地ニ於テ買入レタル一切ノ清國生産物及物品ニシテ海外輸出ヲ禁セラレサルモノハ輸出ノ際單ニ輸出税ヲ納ムル外ハ一切ノ内地税、賦課金、手数料、釐金等ヲ免除セラルヘシ且日本國臣民カ清國各地ニ於テ輸出ノ爲メ買入レタル一切ノ物品モ亦現行章程ニ從ヒ各開港間ニ運搬スルヲ得ルモノトス

第三十條

商品ニシテ其ノ出所外國ニ屬スルコト僞ナク且之ニ對シ已ニ輸入税ヲ完納シタルトキハ其ノ輸入ノ日ヨリ三箇年内何時モ日本國臣民ニ於テ何等ノ輸出税ヲ納ムルコトナクシテ之ヲ清國ヨリ何レノ外國ヘモ輸出スルヲ得又該再輸出者ハ已ニ右商品ニ對シテ納メラレタル輸入税額ニ向テ清國税關ヨリ税金拂戻證書ヲ受クヘシ但シ該商品ハ原荷作ノ儘完全ニ保存セラレ異動ナキヲ要ス右拂戻證書ハ其ノ所有者ノ望ニ因リ清國税關官吏ニ於テ現金ヲ以テ之ヲ償辦スルヲ得ヘキモノトス

第三十四條

清國政府ハ其ノ諸開港地ニ於テ官設倉庫ヲ設クルコトニ同意ス本件ニ關スル規則ハ追テ之ヲ設クヘシ

第三十五條

日本國ノ商船ニシテ噸數百五十噸以上ノモノハ清國ノ開港ニ入航スルニ當リ其ノ登記噸數壹噸ニ付清銀四錢ノ割ヲ以テ噸税ヲ課セラルヘシ噸數百五十噸及其ノ以下ノモノハ登記噸數壹噸ニ付壹錢ノ割トス然レトモ右船舶ニシテ其ノ積荷ニ異動ナク入港後四十八時間以内ニ出港スルモノハ噸税ヲ免除セラルヘシ

日本國ノ船舶前記ノ噸税ヲ納メタル上ハ該税ヲ納メタル港口出發ノ日ヨリ向フ四個月間ハ清國ノ何レノ開港或ハ立寄港ニ於テモ噸税ヲ免除セラルヘシ但シ日本國ノ船舶ハ清國ニ於テ現ニ修繕ヲ加ヘ居ル間ハ噸税ヲ納ムルヲ要セス

清國ノ何レノ開港間ニ於テ旅客、手荷物、書柬、無税品運搬ノ爲メ日本國臣民ノ使用スル小船及艇隻ハ噸税ヲ納ムルコトナカルヘシ尤モ其ノ運搬ノ時ニ當リ税金ヲ課セラルヘキ商品ヲ運搬スル所ノ小船及荷舟ハ總テ壹噸ニ付壹錢ノ割ヲ以テ四個月毎ニ一回噸税ヲ納ムヘシ

日本國ノ船舶及艇隻ニ對シテハ噸税ノ外別ニ手数料或ハ賦金ヲ課スルコトナカルヘシ但シ日本國ノ船舶及艇隻ハ最惠國ノ船舶及艇隻ノ噸税ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ噸税ヲ納ムルコトナシト知ルヘシ

第三十六條

清國ノ開港ニ來航スル日本國ノ商船ハ其ノ入港ノ際隨意ニ水先案内者ヲ雇入ル、コトヲ得該商船總テ正當ノ諸税皆納ノ上出發セムトスル時ハ出港ノ際ニモ亦水先案内者ヲ使用スルコトヲ得

第十七條

日本國ノ商船破損又ハ其ノ他ノ理由ヲ以テ避難所ヲ要スルノ止ムヲ得サルニ至リタルトキハ最寄ノ何レノ清國港口ニモ入港スルコトヲ得尤モ其ノ船舶ノ修繕ヲ遂ル爲メ陸揚シタル物品ニ對シテハ諸稅若ハ噸稅ヲ拂フコトナカルヘシ但シ該物品ハ稅關吏ノ監督ニ屬スルモノトス右等ノ船舶清國沿岸ニ於テ淺瀬ニ乗揚ケ又ハ難破シタルトキハ清國官吏ハ直ニ其ノ乗客及乗組員ヲ救助シ該船舶並ニ其ノ積荷ヲ安全ナラシムルノ措置ヲ施スヘシ而シテ救助シタル人々ニハ懇篤ノ待遇ヲ與ヘ必要ノ場合ニハ最寄ノ領事館マテ送届クヘシ

第十八條

清國ノ商船破損又ハ其ノ他ノ理由ヲ以テ最寄ノ日本港口ニ避難所ヲ要スルノ止ムヲ得サルニ至リタルトキハ該船舶ハ日本官吏ヨリ同一ノ待遇ヲ享有スヘシ

第十九條

諸開港地ニ於ケル清國官吏ハ詐僞又ハ密商ノ爲メ收入ニ減少ヲ來タサ、ル様其ノ必要ナリト認ムル措置ヲ施スヘシ

第二十條

日本國ノ船舶清國ノ強盜又ハ海賊ノ掠奪ニ遇フトキハ該強盜海賊ヲ逮捕處罰シ其ノ贓品ヲ取戻シ之ヲ其ノ持主ニ還付スルコトヲ務ムルハ清國官吏ノ職務タルヘシ

清國ニ在ル日本國臣民ノ身體財產ニ關スル裁判管轄權ハ當該日本國官吏ニ專屬ス日本國臣民或ハ一切ノ他國臣民又ハ人民ヨリ日本國臣民并ニ其ノ財產ニ係ル訴訟ハ總テ清國官吏ノ干涉ヲ受クルコトナク右官吏ニ於テ審理判決スヘシ

第二十一條

清國官吏又ハ臣民カ清國ニ在ル日本國臣民ニ對シ又ハ其ノ財產ニ關シ民事訴訟ヲ起ストキハ日本國官吏ニ於テ之ヲ審理判決スヘシ  
清國臣民ニ對シ又ハ其ノ財產ニ關シ清國ニ在ル日本國官吏或ハ臣民ヨリ起ス所ノ民事訴訟ハ總テ清國官吏ニ於テ之ヲ審理判決スヘシ

第二十二條

清國ニ於テ犯罪ノ被告トナリタル日本國臣民ハ日本國ノ法律ニ依リ日本國官吏之ヲ審理シ其ノ有罪ト認メタルトキハ之ヲ處罰スヘシ

第二十三條

清國ニ在ル日本國臣民ニ對シ犯罪ノ被告トナリタル清國臣民ハ清國ノ法律ニ依リ清國官吏之ヲ審理シ其ノ有罪ト認メタルトキハ之ヲ處罰スヘシ

第二十四條

清國臣民カ日本國臣民ニ對シテ負債ヲ償辦セス又ハ詐僞逃亡スルトキハ清國官吏之ヲ逮捕シ其ノ負債ヲ償還セシムルコトヲ務ムヘシ日本國官吏ニ於テモ日本國臣民カ清國臣民ニ對シテ詐僞逃亡シ又ハ其ノ負債ヲ償辦セサルモノヲ處分スルコトヲ務ムヘシ

清國ニ在ル日本人ニシテ罪ヲ犯シ又ハ負債ヲ償辦セスシテ詐僞逃亡シタル者清國ノ内



地ニ遁レ清國臣民ノ住居若ハ清國船舶中ニ潜伏スルトキハ清國官吏ハ日本國領事ヨリ  
請求次第日本國官吏ニ之ヲ引渡スヘシ

又清國ニ在ル清國人ニシテ罪ヲ犯シ又ハ負債ヲ償辦セスシテ詐偽逃亡シタル者清國ニ  
在ル日本國臣民ノ住居若ハ清國領海ニ於ケル日本國船舶中ニ潜伏スルトキハ清國官吏  
ヨリ日本國官吏ヘ請求次第之ヲ引渡スヘシ

### 第二十五條

日本國ノ政府及臣民ハ其ノ現在効力ヲ有スル日清間條約諸條款ニ據リ得タル一切ノ特  
權免除及利益ヲ享有スルコトヲ更ニ茲ニ確定ス

且日本國ノ政府及臣民ハ大清國皇帝陛下ヨリ他國ノ政府又ハ臣民ニ現ニ附與シ又ハ將  
來附與スヘキ一切ノ特權免除及利益ヲ享有スヘキコトヲ特ニ茲ニ規定ス

### 第二十六條

締盟國ノ一方ハ本條約批准交換ノ日ヨリ十個年ノ終ニ於テ税目及本條約ノ通商ニ關ス  
ル條款ノ改正ヲ要求スルコトヲ得然レトモ若シ最初十個年ノ終ヨリ起算シ六個月以内  
ニ兩締盟國ノ何レヨリモ右要求ヲ爲サス改正ヲ行ハサルトキハ本條約並ニ税目ハ前十  
個年ノ終ヨリ起算シ更ニ十個年間其ノ儘効力ヲ有スヘシ而シテ其ノ後各十個年ノ終ニ  
於ケルモ亦同様タルヘシ

### 第二十七條

締盟國ハ本條約ノ効力ヲ完全ナラシムルニ必要ナル章程ヲ協議決定スヘシ尤モ右章程  
ノ實施セララル、ニ至ル迄ハ現ニ清國ト泰西諸國トノ間ニ存スル取極及章程ニシテ其ノ  
本條約ノ規定ニ矛盾セスシテ適用セラレ得ル限ハ締盟國ニ於テ之ヲ遵守スヘキモノト  
ス

### 第二十八條

本條約ハ日本文漢文及英文ニ調印スヘシ然レトモ將來議論ヲ防ク爲メ締盟國ノ全權大  
臣ハ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニシタルトキハ其ノ異ナル點ハ英文本文  
ニ依テ之ヲ決裁スヘキコトヲ協議決定セリ

### 第二十九條

本條約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於テ之ヲ批准セララルヘク而シテ其ノ批  
准書ハ本條約調印ノ日ヨリ三個月以内ニ可成速ニ北京ニ於テ之ヲ交換スヘシ  
右證據トシテ兩國ノ全權大臣本條約ニ記名調印スルモノナリ

明治二十九年七月二十一日即光緒二十二年六月十一日北京ニ於テ作ル

大日本帝國北京駐劄特命全權公使正四位勳一等男爵林 董 (記名) 印

大清帝國欽差全權大臣總理各國事務大臣尙書銜戶部左侍郎張蔭桓 (記名) 印